

西日本新聞

朝のドラマで話題の美貌歌人
その激動の生涯を読む!
柳原白蓮
●出版部 書店で好評発売中

2014年
6月23日
(月曜日)

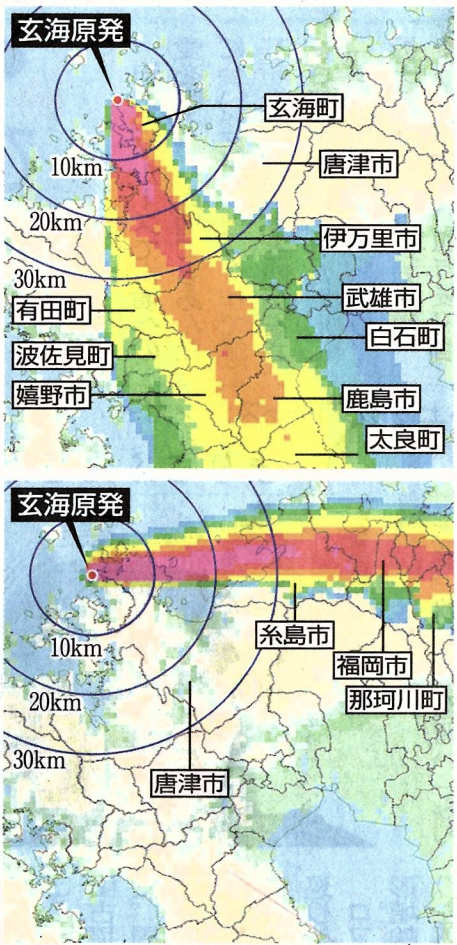
30キ口圏外も高放射線量

福岡市も要避難レベル

東京電力福島第1原発事故と同規模の過酷事故が、九州電力川内原発(鹿児島県薩摩川内市)と玄海原発(佐賀県玄海町)で起きた場合、避難が必要とされる高線量の放射性物質が原発から半径30キ口圏外にも飛散する可能性があることが、民間調査会社「環境総合研究所」(東京)の試算で分かった。風向きによっては、国が事前の避難準備を求めらるおおむね30キ口の緊急防護措置区域(UPZ)を越えて鹿児島市や福岡市の一部にも及ぶ計算となり、国に対策の見直しを求める声が強まりそうだ。

**再稼働を
考える**
地域と原発

川内は鹿児島市まで到達



同研究所は福島原発事故後、最も放射性物質の飛散が多かった2011年3月15日の福島県飯館村や福島市などの放射性セシウム、ヨウ素の観測データから飛散総量を推定。推定した放射性物質の飛散総量が放射性プルーム(放射性雲)となつて移動し、降雨で九州各地に落下した場合の、1時間平均の空間線量率をレベル別に地図に示した。原子力規制庁が12年に公表したのと違い、山や谷などの地形を考慮し、より正確な試算になっているという。

放射性プルーム 原発事故で、気体や粒子状の放射性物質が環境中に放出され、大気とともに雲のように流れる状態。「放射性雲」とも言われる。飛来方向は風向や地形の影響を大きく受け、地表への沈着は降雨や積雪に左右される。プルーム通過時に体面に付着する外部被ばくと、地表への沈着後に食べ物や呼吸などで体内に取り込む内部被ばくが懸念される。

難が困難となる可能性がある。玄海原発では、北風が吹けばプルームが30キ口の佐賀県伊万里市を越え、約31キの同県有田町に達し、同町内で線量は43ギグに上る場所があった。西風は年間を通じ少ないものの、建物などが少ない海上を通ると飛散距離が伸び、福岡市にまで到達。線量は西区内では最大56ギグ、早良区32ギグ、城南区30ギグ、南区29ギグに達した。

UPZ内ではない有田町は今のところ、避難計画を独自に策定する予定はない。福岡市は「30キを越える自治体がどうすべきか、国は早く指針を示してほしい」(防災・危機管理課)と強調する。原子力規制庁は、プルーム通過時の被ばくを避けるための防護措置地域(PPA)をおおむね50キ圏内とする考えは示しているが、「具体的な対策は今後の検討課題」としている。(竹次穂)



風速毎秒2メートルにおける1時間当たりの平均空間線量(単位:マイクログローベルト)

※環境総合研究所による試算